

1. 越前クラゲに関し

1-1

本年、越前クラゲが大量発生しており、昭和以降の記録によると1938～1958年～1995年～2002年から本年までは毎年出現し本年は過去に例のない異常発生をしており、日本海はもとより太平洋岸に至るまで漁業への被害がでており、これまで、北海道において大量の出現確認はされていませんでしたが、7月10日に海洋観測船の陽光丸が長崎沖南西で発見してから日本海沿岸を北上し9月14日には北海道函館近海以後今日まで津軽海峡を横断し太平洋側では登別、苫小牧、浦河、又、日本海側では奥尻、寿都、泊、浜益、苫前、礼文オホーツクでは湧別、常呂、斜里と確認されており、日を追って広がっていることから北海道漁業への被害、影響はどうなっているかお知らせ願います。

答 弁 者 北口 孝郎 水産振興課長

(エチセンクラゲによる被害等についてであります) 本州沿岸海域では、昨年に引き続きエチセンクラゲが、大量かつ継続的に出現し、漁業への影響も出ていることから、道としては、漁協などからの情報収・実体制を強化し、その監視に努めてきたところ。

本道では、日本海オホーツク海及びえりも以西、太平洋の沿岸から情報が寄せられておりますが、これら情報によれば、一部の定置網にクラゲが入り、漁労作業に若干の遅れが見られたものの、大きな影響とは、なっていないとのことであります。

1-2

最近では新聞、テレビとニュースになってはいますがその生態は余りよく知られていないとのことであり、全国に影響が出ておりますので、国や水産機関など、どのような研究対策が進められているのかお知らせ願います。

答 弁 者 北口 孝郎 水産振興課長

(国などの研究についてであります)

水産総合研究センターなどでは、エチセンクラゲの発生要因並びに回遊経路の研究や来遊予測 さらには、漁業被害防止対策の研究に取り組んでいる

ところ。

被害防止対策としては、定置網漁業の魚がたまる袋網部分に、クラゲが通過できない仕切り網を付けることによって、魚とクラゲを分離する技術を開発したり、また、定置網の本体部分まで魚を誘導する垣網に大きな日合いの網を取り付け、クラゲを通過させることにより、網に入るクラゲの量を減らす研究が進められているところ。

このほか、トロール網にステンレスワイヤ』を敷設して、大網したエチセンクラゲを裁断する技術について、現在、開発試験が実施されているところ。

1-3

過去の状況ですと2月ぐらいまで出現していたとのデータがありますが、今後の予測と漁業への影響は、たとえば、日本海側ではさけ定置は終わりますが、太平洋側ではこれからの、さけ漁に期待をかけておりますし、ししゃもなどの漁もありますので、どのように予測し道としてどのような対策を取られているのかお聞かせ願います。

答 弁 者 北口 孝郎 水産振興課長

(今後の予測と対策についてであります)

国の「来遊予測」では、現在、福井県および島根県沿岸に滞留しているエチセンクラゲの大群は、11月中旬までには東北日本海沿岸まで到達するものの、北海道まで到達する予測とは、なっていないところ。

次に、道としての対策についてであります。道では、これまで通り、漁協などからの情報収集に加えて、水産試験場の調査船による調査を実施するなど監視体制を強化しながら、道や水産試験場のホームページで、その情報を提供し、注意喚起に努めているところ。

2. トドの漁業被害対策について

次にトドの漁業被害対策について伺います。南から越前クラゲが来襲してきましたら、今度は、北からトド襲来、北海道漁業はいったいどうなるの、心配が絶えません。

特に日本海の漁業者の所得は低く、トドの来遊時期はやむなく休魚する、さらには燃油の高騰と大変な打撃を受けております、これからの時期、トド対策は急務とされており以前に一般質問もしておりますが、定置の強化網については漁業者からも効果が有ると評価されているようですが、

2-1

強化網とは別にトドの生態等を研究し被害防止のための取り組みについても研究実験してきたように聞いていましたが、その後どのようなになっているか伺います。

答 弁 者 北口 孝郎 水産振興課長

(被害防止のための研究等についてであります)

道では、これまでトドの生態や来遊状況などの基礎調査を実施してきたほか、光や音、臭いを利用してトドを漁場から遠ざける手法の開発試験を行ってきましたが、この開発試験は、一時的な効果は認められたものの、トドは学習能力が高いことから、有効な手法が得られていないところ。

道としては、「効果的なトド被害」対策を検討する上で、トドの生態を解明することは、極めて重要なことと考えており、国と連携して平成16年度から、漁業被害との関連を明らかにするため、航空機を用いた来遊個体数の把握や年齢・性別などの生理・生態、さらには胃の内容物の分析による食性の解明など、総合的な調査を進めているところ。

2-2

強化刺し網の実用化も間近とそんな感じで答弁頂いていたと思っておりましたが、漁業者はその実用化を待ち望んでおります、その進捗状況をお知らせ願います。

答 弁 者 北口 孝郎 水産振興課長

(強化刺し網についてであります)

トドによる漁具被害は、その多くが刺し網で発生していることから道では、平成15年度から3カ年の計画で地元漁業者の協力を得ながら、後志など日本海の4地区で、強化刺し網の実用化に向けた実証化試験を実施しているところ。

過去2カ年の調査では、網の構造や操作性については、一定の成果が得られておりますが、網の価格や漁獲効率などの点で、なお、改良の余地があることから、本年度は、強化網の素材の改良などを重点に試験を進めているところ。

2-3

これまでの強化網同様、強化刺し網が実用化された場合の助成制度はどのようにお考えになっているのか伺います。

答 弁 者 北口 孝郎 水産振興課長

(強化刺し網の助成制度についてであります)

先程も申し上げましたとおり、現在、強化刺し網の早期実用化に向けて、取り組みを推進しているところであり、今後、助成措置については、国とも十分協議して参りたいと考えているところ。

3. 磯焼け対策

3-1

磯焼け対策については、これまで水産試験場等でウニの駆除試験など食害に対する取り組みや海藻の付着力の計測など磯焼けのメカニズムの研究に取り組んできており、一定の結論が出たものと思います、国と連携する研究機関も現在ウニ食害対策の調査に取り組んでいるということでもあります。

より精度の高い調査をすることも必要とは思いますが、どうも同じような事で時間を無駄にしているように感じるのですが国と道の連携は、どのようにされているのか伺います。

答 弁 者 小島 博 水産振興課参事

(磯焼け対策に係る国との連携についてであります)

道では、これまで国と連携しながら、磯焼けに関する調査を実施し、その結果、磯焼けの発生原因と持続原因について、一定の結論を得ているところ。

本道日本海の磯焼けについては、対馬暖流の勢力が増大することによる冬から春の高水温と貧栄養が発生原因であり、水温の上昇によって、海藻の発芽期にウニの摂餌活動が活発になることが、持続原因であることが明らかになっているところ。

これら調査結果に基づき、道としては、ウニの効率的な除去や、除去したウニの再利用について漁業者に提案してきたところ。

また、道の原因究明の成果を基に、独立行政法人水産工学研究所は神恵内において、潜水によるウニの除去によって海藻を繁茂させる大規模な実証試験を実施しているところ。

3-2

磯焼け対策について、国と道で連携して取組がなされているとのことですが、日本海の沿岸漁民のことを考えると、これら実験的な取組から本当に役に立つ事業へと展開を図るべきと考えます。この点について、どのようにお考えなのかお聞かせ願います。

答 弁 者 小島 博 水産振興課参事

(今後の対策についてであります)

道としては、ただ今お答えいたしましたように、磯焼けの持続原因であるウニの食害を防止するため、効率的なウニの除去技術の開発やウニによる発芽期の食害を防ぐための施設の改良に取り組んでいるところ。

今後、コスト面を含めた成果が明らかになった段階で、本格的な事業展開についても検討していく考え。

3-3

磯焼け対策における藻場造成について伺って参りました、海藻類の繁茂は、二酸化炭素の吸収源としても非常に有効であり、最近の海藻研究において、日本全国で年約200万トンが固定されており、森林の約1/10の規模としていますが、面積あたりの高い固定能力があり、温暖化ガスを吸収し大気中に還元しにくいかたちに変換する生態系として重要な役割を果たしていると言われており、地球温暖化対策にも貢献するものと考えますが、道としてはどのように認識され今後の藻場造成を考えるか伺います。

答 弁 者 武内 良雄 水産局長

(今後の藻場造成についてであります)

海藻類が繁茂する藻場は、ウニやアワビなどの有用水産資源の餌料、あるいはニシンなどの産卵場、小魚、の成育場などとして、重要な役割を果たしているところ。

また、海藻類は二酸化炭素を効率よく吸収すると言われており、多面的機能を有する藻場の造成は重要であると考え。

いずれにしましても、トドや磯焼け対策は大変難しい課題ではありますが、今後とも、漁業者の意見をよくお聞きしながら、日本海の漁業生産向上のために、水産振興対策に取り組んで参りたい。